

『タマシイム・マシン』

理学研究科 修士 1 回生 前田悠陽

私たちは多かれ少なかれ、「楽しかったあのころに戻りたい」という叶わぬ願望を抱えて生きています。本稿では、そんな願望を実現するひみつ道具とその登場エピソードを紹介します。

『タマシイム・マシン』あらすじ

物置の片付け中に見つけた幼児期のアルバムを眺めながら、成長するにつれて自分の扱いが粗末になっているように感じるのび太。膝をすりむいて血が出たとママにうったえても、「つばでもつけて、なすっておきなさい」と言われる始末。「おさなかつたあのころに戻りたい……。」とぼやく彼に、ドラえもんは魂を過去に送り込むひみつ道具「タマシイム・マシン」を取り出す。「たまには思い出の世界で遊ぶのもいいだろ」と、ドラえもんも珍しく肯定的である。こうしてのび太は、パパやママ、おばあちゃんがつきっきりで構ってくれた赤ん坊のころに戻るのだった……

言わずと知れたひみつ道具「タイムマシン」のもじりですが、本作は、タイトルの秀逸さもさることながら、『ドラえもん』という作品が、本質的に“子守の物語”であることを思い出させます。のび太という少年を巡る物語の始まりを思い出してみると、ドラえもんは、まさに子守用ロボットとして彼のもとにやってきたのでした。

のび太はパパやママ、今は亡きおばあちゃんに子守され、やがてその役割はドラえもんにとって代わられます。既に子守の役割を終えたママは、成程のび太を無制限に甘やかしたり、つきっきりでその姿を見守ることもないでしょう。このエピソードは、ドラえもんが出したひみつ道具によって、ドラえもんがいなかった時代の、ママの子守を一時的に取り戻すお話と言えるかもしれません。

そして、エピソード中で軸となるのは、子守歌です。

ぼうやはよい子だねんねしな ぼうやのおもりはどこいった

ひとしきり幼児期を楽しんだあと、帰りたかった“あのころ”の象徴として登場する子守歌によって、のび太は現実の世界へと引き戻されます。

タマシイム・マシンを用いて過去に魂を送った結果、もぬけの殻となったのび太の身体を前に、ママは息子が死んだかと思いきやパニックになっていました。のび太が目覚ましてからも、「まだひざががくがくしてるわ。熱が出たみたい」と言い、居間で横になります。そして、そんなママに布団をかけ、かつてママに歌ってもらった子守歌を、今度はのび太がママに歌ってあげるのです。ギャグ漫画としてはよくできたオチですが、同時に読者である私たちの心に、温かな余韻をも残します。

のび太の、自分がしてもらってうれしかったことをそのままママにしてやるという発想は、彼の素朴さ、幼さの象徴であり、同時に子守を脱して成熟へと向かう流れの発現でもあるのです。のび太は将来しずかちゃんと結婚し、ノビスケという子どもをもうけます。いずれのび太は、子守される側から、子守する側へと移行します。子守歌はママからのび太へ、そしてノビスケへと、あるいは形を変えて受け継がれるのでしょうか。

『ドラえもん』は連載後期になると、こうしたのび太の子守から成熟への脱皮を描いたエピソードが多くなってきますが、このエピソードは「小学四年生」1977年1月号に初掲載され、てんコミ全45巻のうち第13巻に収録と、比較的初期の作品となっています。ぜひ一読ください。